



▲川村さんが所属していた高知師範学校女子部本科乙組の集合写真。川村さんは3列目右から6番目

# 夏雲の彼方に

第2次世界大戦末期、高知師範学校女子部在学中に学徒動員として愛知県にあって中島飛行機半田製作所で作業されていた川村富美さん(赤岡町)にお話を伺いました。  
終戦から今年で72年経った今でも、半田で体験した空襲のことは忘れられないという川村さんの貴重な実体験をお届けします。

## お国のために 学徒動員として

赤岡町で生まれ育った川村さん。小学校4年生のころに日中戦争が始まり、小学校5・6年生のころには、学校での生活は授業を中断しては駅へ出征兵士を見送りに行ったり、消火訓練や行進の練習をしたりしていました。学芸会であつても歌や踊りはすべて軍色が強いものへと変化し、学校での生活はどんどんと変わっていきました。

第2次世界大戦中、国内の労働力不足が問題になり、多くの生徒や学生が軍需産業や食料増産のために工場での労働を強いられるようになりました。

昭和20年1月15日、学徒動

員令を受けた高知師範学校女子部生徒132人は、高知駅を出発し、30時間以上かけて愛知県半田市中午町の中島飛行機半田製作所に向かいました。到着した軍需都市・半田は、東南海地震で大被害を受けており、一面がれきの山で川村さんたちは余震と空襲におびえながら工場での作業を強いられました。

寮は、半田製作所から3km離れたところにあり、地面に杭を打っただけのほったて小屋でした。

動員生活中の食事は、動員されてすぐは豚肉や魚などがおかずになることもあり、主食はパンやうどん、麦飯などでした。

しかし、戦局がだんだんと悪くなつてくると、おかずはキャベツや大根、タマネギなどの野菜だけで、主食は家畜飼料であつた大豆かすのご飯がどんぶりにごく軽く一杯とひどいものでした。



## 「本工場がやられた!! 早く壕へ入れ」

昭和20年7月24日

半田空襲

## 爆弾の雨の中を...

たびたび空襲警報が鳴っていましたが、いつも上空を通り過ぎて名古屋方面へ飛び去っていくので、空襲警報に慣れ、みんな待避するのが面倒になっていました。

しかし、昭和20年7月24日早朝6時ごろ、半田市は大空襲を受けました。いつものように空襲警報が鳴り、またかと思いつつ大編隊が来ているという知らせを受けた引率の男性の先生が、違和感を感じて、寮の屋根に登って見るとすでに本工場が爆撃され、爆撃機が低空飛行で真つすぐ寮に向かってきていました。

引率の先生は、爆風で屋根から飛ばされて転げ落ちてすぐに壕に入るようにと、学生に大声で呼びかけ、先生の緊迫した声に導かれ、みんな急いで壕に待避しました。

「爆弾が落下してくる時のザザザという音はまるで豪雨のような音で、その後にくるドカーンというすさまじい爆発音は、今でも昨日のことのようにはっ



▲川村さんのご主人が実際に戦争に持って行った水筒



▲川村さんが実際に工場に身につけていた帽子とゲートル(脚絆)



当時の様子を語る川村富美さん